

行われたことは主に次の二つ

- (1)ウェブサイトの紹介（ホームページについて上野さんによるプレゼン）と今後の運用についての相談
- (2)ラウダンの **Science and Values** の翻訳（近日公刊）の解説の原稿を戸田山さんが解説し、それをネタに議論

(1)ウェブサイト関連

- ・「つくる会」ホームページと「隠れカルテジアン」のページがある
- ・隠れカルテジアンとは科学哲学に興味を持つ科学者のこと
「隠れカルテジアン」のページは科学者向けのページだが、
「つくる会」メンバーは **host** として関わりをもつ
- ・内部ページ用の **ID** とパスワードは個々に配布する
- ・コアメンバーでメーリングリストをつくる
- ・スカイプも使えるようにしたいが回線が安定しない
- ・自己紹介文を書く

(2)ラウダンの解説をめぐって

- ・ラウダン(Larry Laudan)はアメリカの科学哲学者
自然主義者にして合理主義者・プラグマティストであり、反実在論者
(これをそれぞれ説明していく。これらの用語には哲学特有の意味合いがある)

今回は「Ⅱ 合理主義者としてのラウダン」の

「1 科学哲学における合理主義と相対主義」について

- ・「合理主義」の主張
- (1)理論交代において旧理論より新理論の方が優れているとする客観的基準がある。
- (2)その基準は、科学者が複数の科学理論のうちどれかを選択する際の規範としても役立つ。
- (3)理論が次々と交代していく科学の歴史を累積的進歩の歴史として見ることができ、「進歩の方向性」がある。

「相対主義」の主張（上の反対）

- (1)旧理論より新理論の方が優れているとする客観的基準はない。
- (2)理論選択の合理的方法論はない。
- (3)科学の歴史を進歩の歴史として見ることはできない。

・ここでディスカッション

Q（熊・長）：両者を対立する立場とするのには違和感がある。

科学にはどちらの要素もある。

どれだけの時間幅で見るとかなどのスケールによって、
一方が正しかったり他方が正しかったりする。

A（戸）：私もミクロな（短期的・個人的）レベルでは科学者は非合理的に振る舞っている（社会的要因が大きい）ように見えるが、マクロな（長期的・集団）レベルでは合理的な活動として記述できる、と考えている（これは全体として科学はうまくいっているということによって合理主義的な立場と言える）。

しかし科学哲学の歴史においては実際に合理主義と相対主義の対立があったので、解説としてはそれでよい。

・歴史的にはクーン以降、合理主義的な右派と相対主義的な左派に分かれる。

クーン左派：ファイヤーアーベント、科学的知識の社会学(SSK)、社会構成主義

クーン右派：ラカトシュ、ラウダン